

2012年4月26日

## 47th RELC International Seminar (4/16-18/12)参加報告書

金岡 正夫 (国際交流委員会委員、鹿児島大学)

今回の RELC セミナー派遣報告に関して、(1)全体概要、(2)セミナーの趣旨と全体的特長、(3)派遣発表、(4)JACET 全国大会で参考にすべき取り組み(理由含む)の4点について報告したい。

### (1) 全体概要

シンガポールで開催された 47th RELC International Seminar (2012年4月16日～18日の3日間) 於 SAMEO Regional Language Center / テーマ “Multiliteracies in language education)に参加した。21世紀の英語教育の方向性として IT を駆使した学習ツールの利便性と学習メディアの多様化が日常化している。そのような社会的文脈性とこれからのグローバルイングリッシュのあり方をふまえて multiliteracies に対する講演、研究発表、ワークショップが行われた。約 300 名がアジア各国、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、英国、ドイツ、カナダから参加した(大会資料より。日本からは私のみ。韓国からは出席なし)。会場は同センター (RELC International Hotel 兼用) で、企業展示(教科書、学習教材、専門書、ジャーナルの展示)もここで行われた。

### (2) セミナーの趣旨と全体的特長

多面的な観点(e.g. 社会言語学、記号論、学校教育)を包摂しながら英語教育における multiple literacies の捉え方(理論的枠組み)と教授法の開発、教室での応用実践、カリキュラム構築と評価のあり方について、研究成果報告と意見交換が3日間行われた。(1) invited speakers による講演(60分)が10件、(2)同 speakers を囲んだフリートークセッション(Q&A 中心、speakers は2名単位に分けられ、各会場へ分散)という、invited speakers 関連のイベントが3件、(3)一般参加の paper presentation(40分)が parallel sessions の形で45件、そして(4)ワークショップ(90分)が20件行われた(注:invited speakers によるワークショップ含む)。

Invited speakers をみると、Len Unsworth (教材開発論: picture books and animated movies)、Ian McGrath (理論的枠組み: communicative competence for multiliteracies)、Denise Newfield (教授法の実例: a pedagogy of multiliteracies in South Africa)、Wolfgang Hallet (記号論・意味論: multiliteracies as the multiple modes of communication)、Maureen Walsh (言語教育: multiple texts and multiple modes for language and literacy education)、Caroline Ho (カリキュラム開発と評価: curricular, pedagogic and assessment initiatives)、Jamie Keddie (ビジュアル教材: videotelling)、Eveline Chan (教科書中心の質的・量的分析: multimodal literacies and subject area assessments)、Barry O’ Sullivan (今

後の研究課題と評価のあり方: *multiple literacies and assessment*)、Sean Elwell-Sutton (デジタル技術とモーダリティーの多様化を生かした学習リソース: *digital technology and multimodalities and blended language learning resources*)、以上 10 名の専門領域からの報告、提言、研究的示唆となっている(注: 英語部分はタイトルを要約化したものである)。南アフリカ、ドイツ、オーストラリア等、様々な国からの招待である。Opening Ceremony (Mrs. Tay Sor Har, Director, SAMEO Regional Language Centre) で *multiple literacies* という概念は 21 世紀における新たな *communicative competence* の指標 (e.g. 学習目標、教授法開発、カリキュラム評価等) となり得るし、そうあるべきであると言及された。そのメッセージを受けて、*invited speakers* の構成はバランスよく包括されたものといえる。

*Invites speakers* では、Ian McGrath (Title: *From designing for communicative competence to designing for multiliteracies*)、Barry O' Sullivan (Title: *Multiliteracies and assessment: Issues and opportunities*) の講演が印象的で、意義のある示唆がなされた。前者において *Multiliteracies* の学習文脈上、3つの英語学習目標が提示された(情報への機能的アクセス、獲得した情報の有効性(有用性)の評価、意味づけとしてのテクノロジー利用)。これまでのテキスト主体の *literacy* 教育とは異なり、*multiliteracies* の英語教育では(1) *linguistic*, (2) *gestual*, (3) *spatial*, (4) *auditory*, (5) *visual* という5つのモダリティーを包括した *multimodal text* の導入が提言された。後者はテストングと評価の観点から *argumentative* なレクチャーが行われた。テストング開発に関する歴史的流れを踏まえ、これからの *multiple literacies* に向けてどのようなテストングがなされ、言語運用能力として評価されることが可能か(すべきか)私見が述べられた。テストング評価の基本哲学は *curriculum, delivery, assessment* がトライアングルの関係(三位一体化)であること。それが学習者のリテラシー評価の正統的なベースである点が強調された。*Test performance* において *test system* と *scoring system* のために *test taker* の役割と本質を捉えるのではなく、上述の 3 要素の視点から *test taker* のためのテストングを *multiple literacies* の文脈でも捉えていく必要性が語られた。その意味で “*multiple standardized tests are multiple literacies … I don't believe it.*” という発言は深い示唆を与えた。

### (3) 派遣発表

3 日間のセミナーの印象として授業実践にむけた実際的な教授法、応用事例、授業実践例の報告が目立った。それらは K-12 をベースにしたものだった。それとは違う観点から私は *paper presentation* を行った。カリキュラム評価の観点から大学(高等)教育における *multiliteracies* はどのような定義づけが可能かについて、(1)日本の英語教育改革の流れ(e.g. 初等・中等教育における新学習指導要領の導入と英語教育の特徴立った改革方針)、(2)米国の外国語教育政策(ACTFL)および EU 諸国の場合(CEFR, ELP)、そして(3)OECD の教育方針(成人教育、大学教育)の共通性についてカリキュラム政策の観点から考察を行い、そこから導出される日本の大学英語教育における *multiple literacies* とはどうあるべきか、それは今回のセミナーで議論され、定

義づけがなされようとしているものと共似性があることを示唆しながら、私見としての結論を述べた。**Multiple literacies**の流れと平行して考えるべき言語教育政策の問題として、**EFL**から**EIL**の流れが現実としてあり、これまでの行動・機能主義重視からグローバル市民の育成を視野にいれた言語運用能力の育成という問題がある。すくなくそれは社会構築主義の視点を必要としている。**EIL**と社会構築主義というグローバルな流れを同軸で捉えながら **multiple literacies** のあり方について考えていくことは重要であり、とりわけ高等教育レベルではそうである点を強調して発表を締めくくった。10名の聴衆であったが、うち4名は今回のセミナー実行委員(**RELC**スタッフ)であり、日本の教育事情や英語教育の改革の流れについて興味と関心を示してくれた(発表後の質問も含めて)。

#### (4) **JACET** 全国大会で参考にすべき取り組み

参加人数や開催規模に関して **RELC** セミナーは **JACET** 全国大会よりも小規模となっている。が、諸外国からの参加を考慮した、“**participant-centered international conference/seminar**”だと痛切に感じた。“受け身の参加”ではなく、“同一視点に立った自発的な関わりと協働性”を参加者に体験させてくれる内容構成であり、個人的にモチベーションが高まった。その要因となる取り組み3点を紹介したい。

##### 1) **Conversations with Invited Speakers (RELC Seminar 初日の最終セッション、60分)**

各小会場で **Invited speakers** 2名を取り囲み、**MC** 1名 (**RELC** スタッフ)の進行により参加者(最大15名程度)全員が輪になり、くつろいだ雰囲気作りの中でのフリートークセッションが行われた。事前申し込み(登録制で、大会初日に **admission ticket** 配布)で人数限定であるが、研究最前線の著名な **speakers** との距離感は近く、**MC** のムードづくりにより **persona** が確立され、実のある議論ができた(私が参加したセッションでは、**RELC** の **Dr. Hanna Pillay** が **MC** 担当)。大会テーマをより **specific** にほりさげ、実質化をめざすセッションである。講演や研究発表では聞けない、カバーできない情報や意見交換がここでは可能である。

##### 2) **Seminar Round-up and Closing(最終日、70分、開会・閉会挨拶会場)**

3日間のセミナーの締めくくりとして、**invited speakers** 全員がステージに準備されたソファ(注:イスではない)に座り、**MC** が真ん中に座り(同じく **Dr. Pillay** 担当)、予め所定のフォームに書き込まれた質問(3-4問程度に厳選)が大スクリーンに映し出され(注:**invited speakers** 用に、数台のノートPCが配置)、それについて **speaker(s)**がフィードバックしていくイベントである。締めくくりとしてじつに効果的であった(セミナー参加によって出てきた質問ゆえ、**audience** 同士で深く共有できるものだった)。最後まで“参加者に納得と充実・満足感”を与える配慮がなされていた。その後にセミナー全体のアンケート回答(回収)、そして閉会となった。

##### 3) **Coffee Break** (毎日午前中、10:25-10:55、所定場所)

時間をつめてセッションを入れていくのではなく、毎日午前中 30 分間、参加者同士の情報交換、紹介などのコミュニティーの場がコーヒー、お菓子などが用意された(1F を専用フロアとして利用)。これも「コミュニティー」づくりに大きな役割を果たした。気分転換にも役立った。

結論として、参加者のことを考えた 3 日間の企画となっている。JACET も国際大会の色合いを強くしていくならば、これら 3 点は参考となる事例である。規模が大きくなる分、どこかが手薄になってしまう。が、それが参加者にかぶってはいけない。海外参加者にもい通用する大会づくりをしていかななくてはならない。

最後に JACET 派遣に対する RELC の対応について付言しておきたい(箇条書き)。

- 空港と宿泊先との間でアテンドがついた(行き帰り)
- Opening ceremony では“指定席”が設けられていた(最前列。他の交流学会からの派遣も同じ。ちなみに invited speakers は 2 列目)
- セミナー参加時に配布されたオリジナルバックと名札は、一般参加者と区別されていた(色、一部デザインなど。Invited speakers と同じものが配布された)
- Opening ceremony 終了後に別室移動(30 分間のレセプション)。立食(バイキング)で RELC スタッフ、セミナー実行委員、Invited speakers との交流会が持たれた。なお、会場を出る際、一番先にレセプション会場に誘導された(Invited speakers はその後)。

対応は満足のいくもので、friendliness と hospitality に十分な配慮をして頂いたと感じ、感謝している。

以上